

## 養護教諭の自己効力感の特徴と養護実践における研究活動

### Characteristics of *Yogo* Teachers' Self-efficacy and Their Research Activities in *Yogo* Practice

渡辺美恵<sup>\*1</sup>, 土田満<sup>\*2</sup>, 山田小夜子<sup>\*3</sup>

<sup>\*1</sup> 岐阜県関市立緑ヶ丘中学校, <sup>\*2</sup> 愛知みずほ大学, <sup>\*3</sup> 中部学院大学

Mie WATANABE<sup>\*1</sup>, Mitsuru TSUCHIDA<sup>\*2</sup>, Sayoko YAMADA<sup>\*3</sup>

<sup>\*1</sup> Midorigaoka Junior High School in Seki, <sup>\*2</sup> Aichi Mizuho College, <sup>\*3</sup> Chubu Gakuin University

#### Abstract

This study examined the characteristics of *yogo* teachers' research activities and related factors, with the aim of clarifying the influences of such activities on work-related duties. The study was conducted within the period between August 8 and September 12, 2012, involving 124 *yogo* teachers working at public elementary and junior high schools located in A-Prefecture.

On factor analysis, 5 factors representing the characteristics of *yogo* teachers' self-efficacy were extracted: "playing a central role in school health-promoting activities", "managing mental and physical health problems", "establishing trust-based relationships with those involved", "summarizing self-education approaches", and "actively addressing health education".

Factor 1: "playing a central role in school health-promoting activities" was correlated with the following items: the length of experience, training facility, and experience of making presentations on *yogo* practice as part of research activities as subjects' attributes; levels of difficulty, distress, and comfort based on the impression of each research activity; practice verification; and research activities as a *yogo* teacher. Factor 2: "managing mental and physical health problems" was correlated with: the levels of distress and comfort based on the impression of each research activity; and practice verification. Factor 3: "establishing trust-based relationships with those involved" was correlated with: the type of school, the length of experience, training course, participation in academic meetings as part of research activities, experience of making presentations on *yogo* practice, practice verification, and research activities as a *yogo* teacher. Factor 4: "summarizing self-education approaches" was correlated with: participation in academic meetings as part of research activities, the experience of making presentations on *yogo* practice; levels of difficulty, usefulness, distress, and comfort based on the impression of each research activity; practice verification, and research activities as a *yogo* teacher. Factor 5: "actively addressing health education" was correlated with: the length of experience, training facility, research, the status of research activities, levels of distress and comfort based on the impression of each research activity, practice verification, and research activities as a *yogo* teacher. Only practice verification showed a significant correlation with all of the 5 factors. Job satisfaction levels and interpersonal relationships in the workplace were not significantly correlated with any of them.

Based on these results, it may be necessary to objectively organize *yogo* teachers' research activities by analyzing and discussing unclear points and challenges related to *yogo* practice, which are identified or classified through practice verification, in order to effectively use their outcomes for future *yogo* practice. The possibility of all settings of such practice being appropriate topics for *yogo* teachers to examine this issue was also suggested.

Key words : self-efficacy, research activity, *yogo* practice, appropriate topics

## I はじめに

中央教育審議会答申(平成24年)<sup>1)</sup>において、これからの社会と学校に期待される役割として、社会の急激な変化に伴って複雑化・多様化した課題に対応することが求められると述べられている。また、これからの教員に求められる資質能力においても、教職生活全体を通じて、実践的指導力等を高めるとともに、社会の急速な進展の中で、知識・技術の絶えざる刷新が必要であることから、教員が探究心を持ち、学び続けることが不可欠であると、「学び続ける教師像」の確立についても述べられている。

養護教諭は、学校保健活動の推進に当たって中核的な役割を果たしており、現代的な健康課題解決に向けて重要な責務を担っている<sup>2)</sup>。児童生徒の心身に関わる様々な課題への適切な対応のためにも、専門的知識や技術などを向上させることが期待されている。専門的知識や技術などの向上は、養護教諭の職務への自信の向上にも重要な要素となることが考えられる。

Bandura<sup>3)</sup>は、「自己効力感 (self-efficacy) とは、積極的に課題に取り組むというような認識を意図的に働かせることであり、この自己効力感が行動の開発や学習への自信や意欲を促す」と定義している。自己効力感とは、ある行動を確実に遂行し、望ましい結果を得ようとする信念であり、ある行動の先行要因としてその行動の遂行を促進・抑制し、将来の行動の改善を予測する重要な因子となる。つまり、その行動に対する自分自身の能力の捉え方、自己効力感が高いほど実際に行動できる可能性が高いと言えることから、養護教諭の職務に対する行動への自信も、自己効力感として捉えることができる。これまで自己効力感に関する研究は、看護の分野で多く行われており、患者及び看護者の自己効力感を高めることの重要性が報告されている<sup>4)6)</sup>。また、看護学生の自己効力感に関する研究では、看護教育において学生が達成感を得やすい目標の設定の重要性が明らかにされている<sup>7)9)</sup>。教育心理の分野においては、自己効力感が低いと、無気力、無関心、劣等感、抑うつ状態等がみられることも報告されている<sup>10)</sup>。一方、学校保健の分野でも自己効力感に関する研究<sup>11)</sup>は行われているが、養護教諭に関しては豊島ら<sup>12)</sup>により、勤務年数、実践検証、仕事満足度、職場の人間関係が養護教諭の自己効力感に影響を与えていることや、鈴木ら<sup>13)14)</sup>により、管理職のリーダーシップが職場風土を介して間接的に養護教諭の自己効力感やストレス等、職務態度全般に影響があることが明らかにされている。なかでも、自己効力感と実践検証との有意な関連が認められたことは、自己の実践を振り返り、自己研修や実践への問いかけを行うことで力量が高められ、職能成長が期待できる<sup>12)</sup>と考えられる。

養護教諭の専門領域における主な職務内容の中に、「学校保健に関わる研究」が示されている<sup>15)</sup>。著者ら<sup>16)</sup>は、

日々の自己実践を振り返り検証する実践検証を研究の原点とし、職務上の課題や疑問への問いかけについて、実践研究として積極的に研究活動に取り組むことが職務への自己効力感を高めることにつながることから、積極的に研究に取り組むことが重要であることを報告した。学び続ける養護教諭として、養護教諭だからこそできる実践を理論化する研究に取り組むことも専門的知識や技術などを向上させることにつながる活動であると考えられる。

前述した背景を踏まえ、本稿では、養護教諭の自己効力感が職務に影響を与えることを明らかにするために、養護教諭の自己効力感の特徴と自己効力感に関連する要因について検討した。

## II 研究方法

### 1. 調査対象・調査時期・調査方法

A県内の2地区における7郡市の公立小・中学校に勤務する養護教諭135名を対象として、2012年8月8日～9月12日に、無記名自記式のアンケート用紙を用いて調査を行った。各郡市の養護教諭部会長を通じて調査依頼をし、夏季の養護教諭部会(研修会など)においてアンケート用紙を配布して、会の終了後に回収した。

### 2. 倫理的配慮

本調査により得た結果は「コンピュータによって統計処理および解析を行うこと、および、本調査への協力は自由意思によるものであること」を調査依頼文に明記し、質問紙の返却と同意への署名をもって協力の意志を確認した。

### 3. 調査内容

質問項目は以下のとおりである。

#### 1) 対象者の属性

勤務校種、現在の勤務校の学校規模、現在の勤務校での勤務年数、年代、これまでの勤務校種と勤務年数、養成機関の6項目において選択式および記述式とした。

#### 2) 研究に関する現状

養護教諭の研究に関する先行研究<sup>17)</sup>を参考に作成した。学会や研究会への所属、学会への参加経験、論文や実践の発表経験、現在の研究の状況、研究の種類、共同研究者の有無、研究で得られた効果についての8項目について選択式および記述式とした。

#### 3) 研究のイメージ

養護教諭の研究に関する先行研究<sup>17)</sup>を参考に作成した。研究の難易度では「易しい」「少し易しい」「少し難しい」「難しい」、有益度では「有益」「少し有益」「少し無益」「無益」、苦楽度では「楽しい」「少し楽しい」「少し苦しい」「苦しい」の3項目のイメージについて、それぞれ4件法を選択式とした。

#### 4) 養護教諭の研究活動尺度

看護専門学校教員の研究活動尺度に関する先行研究<sup>18)</sup>を参考に、「研究の実践」「研究意欲」「研究活動の環境」の要因から 15 項目を抽出・改編して作成した。すべての項目は、「非常に思う (7 点)」「思う (6 点)」「少し思う (5 点)」「ふつう (4 点)」「少し思わない (3 点)」「思わない (2 点)」「非常に思わない (1 点)」の 7 件法の選択式とした。

#### 5) 養護教諭の自己効力感尺度

養護教諭の自己効力感に関する先行研究<sup>13-14)</sup>で作成された養護教諭の自己効力感尺度の 40 項目のうち、A 県で使用されていない名称について一部変更して使用した。すべての項目を「非常に思う (7 点)」から「非常に思わない (1 点)」の 7 件法の選択式とした。

#### 6) 養護教諭の職務への自己効力感の関連要因

職務への自己効力感の関連要因として先行研究<sup>12-14)</sup>で報告されている、養護教諭の仕事への満足度 (以下、仕事満足度と示す)、学校内の教職員間の人間関係 (以下、職場の人間関係と示す)、自己の実践の振り返り検証の頻度 (以下、実践検証と示す) を取り上げ、すべての項目を 5 件法の選択式とした。また、関連要因として報告がある勤務年数については対象者の属性、学会参加については研究に関する現状の中で回答を求めた。

### 4. 分析方法

養護教諭の自己効力感尺度の質問項目については単純集計し、平均値と標準偏差を算出した。養護教諭の自己効力感尺度は、主因子法プロマックス回転で因子分析を行った。養護教諭の研究活動は、研究活動得点平均値を低値群 (～3.84) (以下、研究活動L群と示す)・中間値群 (3.85～4.44) (以下、研究活動M群と示す)・高値群 (4.45～) (以下、研究活動H群と示す) の 3 分位で群分けした。養護教諭の自己効力感尺度の因子分析で抽出された因子と属性等の要因との関連については、校種、学会等の所属、学会への参加経験、論文等の発表経験、実践の発表経験、研究の状況には t 検定、あるいは Mann-Whitney の U 検定を行った。学校規模、着任年数、経験年数、養成機関、研究のイメージの難易度、有益度、苦楽度、仕事満足度、職場の人間関係、実践検証、養護教諭の自己効力感は一元配置分散分析、あるいは Kruskal-Wallis の H 検定を行った。多重比較は、Bonferroni の検定を行った。

統計解析には IBM SPSS Statistics ver.19.0 を用いた。各検定においては危険率 5%以下を有意水準とした。

## III 結果

回収数 130 名 (回収率 96.3%) であった。そのうち、「養護教諭の研究活動尺度」と「養護教諭の自己効力感尺度」の全項目に回答があった 124 名を分析対象とした。有効回答率は、91.9%である。

### 1. 養護教諭の自己効力感尺度の得点と回答者の分布

養護教諭の自己効力感尺度を構成する質問項目の得点と回答者の分布を表 1 に示した。1 つの選択肢に 50%以上の回答が集中した項目は「1. 子どもの痛みや感情を受け止めたかかわりをする」「2. 個別の健康ニーズに応じた関わりをする」「9. 保健室外でも、子どもと積極的に関わる」「14. 養護教諭の日々の基本的な活動をする」の 4 項目であった。質問項目全体の自己効力感得点平均値は 5.00 (SD=0.51) でふつう (4 点) を上回っていた。

自己効力感得点平均値の高い項目は「7. 保健室でのルールを子どもに伝える」で 5.98 (SD=0.89)、次いで「8. 必要に応じて、子どもに対して毅然とした態度をとる」で 5.92 (SD=1.02)、「9. 保健室外でも、子どもと積極的に関わる」で 5.87 (SD=0.80) といずれも大変高い得点であった。逆に、低い項目は「29. 自分の実践をまとめたり、他からの評価を受けたりする機会をもつ」が 3.92 (SD=1.30) でふつう (4 点) を下回っており、次いで「28. 生活の中の出来事を教材化する工夫をする」が 4.33 (SD=1.03)、「21. 保健主事に適切なアドバイスをする (兼任の場合を除く)」で 4.40 (SD=1.25) と「34. 学校保健組織作りのリーダーシップを取る」で 4.40 (SD=1.20) であった。

### 2. 養護教諭の自己効力感尺度の因子分析

養護教諭の自己効力感尺度を、主因子法プロマックス回転により因子分析を行った結果を表 2 に示した。

固有値の推移と解釈の可能性、先行研究での因子分析の結果を参考に 5 因子を採用し、質問が対象者全体を対象としない 2 項目と因子負荷量が 0.40 未満の 6 項目を除いた 32 項目について因子を構成した。各因子の Cronbach の  $\alpha$  係数は、0.938～0.859 であった。

第 1 因子は「34. 学校保健組織作りのリーダーシップを取る」「35. 学校保健活動を推進するためのコーディネートをする」などの 11 項目からなり、これらが学校保健活動全般において養護教諭が果たしているリーダー的役割などを示していることから『学校保健活動のリーダー的役割』と命名した。第 2 因子は「1. 子どもの痛みや感情を受け止めたかかわりをする」「6. 保健室に来室している複数の子どもたちに目配りや声かけをしながら、状況を把握する」などの 8 項目からなり、健康相談をはじめとする子どもたちとの関わり場面を示していることから『心身の健康課題への対応』と命名した。第 3 因子は「18. 担任から、気になる子どもについての相談がもちかけられる」「19. 担任の子ども理解について、支援やアドバイスをする」などの 7 項目からなり、児童生徒への理解や支援のための他者との連携の場面について示していることから『関係者との信頼関係づくり』と命名した。第 4 因子は「29. 自分の実践をまとめたり、他からの評価を受けたりする機会をもつ」「26. 自分自

表 1. 養護教諭の自己効力感尺度を構成する質問項目の得点と回答者の分布

質問項目	m±SD	人数 (%)					思わない
		非常に思う	思う	少し思う	ふつう	少し思わない	
1. 子どもの痛みや感情を受け止めたかかわりをする	5.67 ± 0.79	10 ( 8.1 )	78 ( 62.9 )	21 ( 16.9 )	15 ( 12.1 )	0 ( 0.0 )	0 ( 0.0 )
2. 個別の健康ニーズに応じたかかわりをする	5.55 ± 0.82	9 ( 7.3 )	66 ( 53.2 )	34 ( 27.4 )	14 ( 11.3 )	1 ( 0.8 )	0 ( 0.0 )
3. 子どもの訴えの背景 (悩みや生活状況など) を適切に把握する	5.50 ± 0.89	12 ( 9.7 )	58 ( 46.8 )	35 ( 28.2 )	18 ( 14.5 )	1 ( 0.8 )	0 ( 0.0 )
4. 個別の健康ニーズに応じた支援計画を作成する	4.52 ± 1.04	1 ( 0.8 )	22 ( 17.7 )	41 ( 33.1 )	40 ( 32.3 )	17 ( 13.7 )	0 ( 0.0 )
5. 子どもの自己肯定感を高めるような支援をする	5.26 ± 1.04	7 ( 5.6 )	57 ( 46.0 )	29 ( 23.4 )	24 ( 19.4 )	6 ( 4.8 )	0 ( 0.0 )
6. 保健室に来室している複数の子どもたちに目配りや声かけをしながら、状況を把握する	5.61 ± 0.99	24 ( 19.4 )	48 ( 38.7 )	34 ( 27.4 )	16 ( 12.9 )	2 ( 1.6 )	0 ( 0.0 )
7. 保健室でのルールを子どもに伝える	5.98 ± 0.89	37 ( 29.8 )	59 ( 47.6 )	17 ( 13.7 )	11 ( 8.9 )	0 ( 0.0 )	0 ( 0.0 )
8. 必要に応じて、子どもに対して毅然とした態度をとる	5.92 ± 1.02	38 ( 30.6 )	55 ( 44.4 )	18 ( 14.5 )	9 ( 7.3 )	4 ( 3.2 )	0 ( 0.0 )
9. 保健室外でも、子どもと積極的にかかわる	5.87 ± 0.80	25 ( 20.2 )	64 ( 51.6 )	30 ( 24.2 )	4 ( 3.2 )	1 ( 0.8 )	0 ( 0.0 )
10. わかりやすい保健指導をする	4.93 ± 1.04	6 ( 4.8 )	33 ( 26.6 )	41 ( 33.1 )	35 ( 28.2 )	8 ( 6.5 )	0 ( 0.0 )
11. 担任と協力して、保健学習をする	4.57 ± 1.29	5 ( 4.0 )	26 ( 21.0 )	36 ( 29.0 )	36 ( 29.0 )	13 ( 10.5 )	3 ( 2.4 )
12. 担任と協力して、あるいは独自で保健学習をする	4.42 ± 1.29	4 ( 3.2 )	25 ( 20.2 )	26 ( 21.0 )	45 ( 36.3 )	14 ( 11.3 )	2 ( 1.6 )
13. 児童生徒の委員会活動で、子どもの興味や関心を引き出す	4.91 ± 1.13	7 ( 5.6 )	36 ( 29.0 )	34 ( 27.4 )	36 ( 29.0 )	8 ( 6.5 )	0 ( 0.0 )
14. 養護教諭の日々の基本的な活動をする	5.69 ± 0.93	21 ( 16.9 )	63 ( 50.8 )	21 ( 16.9 )	19 ( 15.3 )	0 ( 0.0 )	0 ( 0.0 )
15. 健康診断や健康相談など、健康管理の方法を工夫して実施する	5.35 ± 1.02	15 ( 12.1 )	44 ( 35.5 )	40 ( 32.3 )	20 ( 16.1 )	5 ( 4.0 )	0 ( 0.0 )
16. 安全に関する活動を積極的に推進する	4.82 ± 1.05	3 ( 2.4 )	33 ( 26.6 )	41 ( 33.1 )	36 ( 29.0 )	8 ( 6.5 )	0 ( 0.0 )
17. 環境衛生に関する活動を積極的に推進する	4.78 ± 1.06	5 ( 4.0 )	28 ( 22.6 )	39 ( 31.5 )	41 ( 33.1 )	9 ( 7.3 )	0 ( 0.0 )
18. 担任から、気になる子どもについての相談がもちかけられる	5.65 ± 0.94	19 ( 15.3 )	59 ( 47.6 )	32 ( 25.8 )	12 ( 9.7 )	1 ( 0.8 )	0 ( 0.0 )
19. 担任の子ども理解について、支援やアドバイスを	5.21 ± 1.08	9 ( 7.3 )	48 ( 38.7 )	37 ( 29.8 )	22 ( 17.7 )	6 ( 4.8 )	0 ( 0.0 )
20. 教職員の心身のサポートをする	5.01 ± 1.15	6 ( 4.8 )	43 ( 34.7 )	38 ( 30.6 )	23 ( 18.5 )	12 ( 9.7 )	1 ( 0.8 )
21. 保健室事に適切なアドバイスを (兼任の場合を除く)	4.40 ± 1.25	2 ( 2.6 )	14 ( 17.9 )	18 ( 23.1 )	31 ( 39.7 )	7 ( 3.9 )	4 ( 5.1 )
22. 保健室と協力して学校保健活動を行う (兼任の場合を除く)	4.95 ± 1.17	5 ( 6.4 )	25 ( 32.1 )	17 ( 21.8 )	26 ( 33.3 )	2 ( 1.1 )	3 ( 3.8 )
23. スクールカウンセラーや相談員・支援員など (地域担当者も含む) とうまく連携する	5.56 ± 1.08	21 ( 16.9 )	54 ( 43.5 )	28 ( 22.6 )	17 ( 13.7 )	2 ( 1.6 )	0 ( 0.0 )
24. 保護者と子どもの健康実態について話を	5.33 ± 0.91	6 ( 4.8 )	57 ( 46.0 )	36 ( 29.0 )	22 ( 17.7 )	3 ( 2.4 )	0 ( 0.0 )
25. 保護者や家族との連携を深める	5.23 ± 0.96	8 ( 6.5 )	46 ( 37.1 )	41 ( 33.1 )	26 ( 21.0 )	2 ( 1.6 )	0 ( 0.0 )
26. 自分自身のテーマをもって研究する	4.50 ± 1.21	5 ( 4.0 )	20 ( 16.1 )	36 ( 29.0 )	42 ( 33.9 )	16 ( 12.9 )	2 ( 1.6 )
27. 救急処置・カウンセリングなどの実技能力を身につける研修をする	4.98 ± 1.12	9 ( 7.3 )	36 ( 29.0 )	34 ( 27.4 )	36 ( 29.0 )	7 ( 5.6 )	0 ( 0.0 )
28. 生活の中の出発点を教材化する工夫をする	4.33 ± 1.03	2 ( 1.6 )	13 ( 10.5 )	36 ( 29.0 )	51 ( 41.1 )	18 ( 14.5 )	3 ( 2.4 )
29. 自分自身の実践をまとめたり、他からの評価を受けたたりする機会をもつ	3.92 ± 1.30	3 ( 2.4 )	12 ( 9.7 )	22 ( 17.7 )	42 ( 33.9 )	28 ( 22.6 )	14 ( 11.3 )
30. 自分自身の豊かな感性をほぐす	4.80 ± 1.10	5 ( 4.0 )	34 ( 27.4 )	28 ( 22.6 )	48 ( 38.7 )	7 ( 5.6 )	1 ( 0.8 )
31. 学校医や地域の医療機関と学校の健康実態について話し合う	4.66 ± 1.18	3 ( 2.4 )	31 ( 25.0 )	34 ( 27.4 )	41 ( 33.1 )	8 ( 6.5 )	6 ( 4.8 )
32. 子どもとの問題や学校の問題を、広い視野から見直す	4.65 ± 1.07	2 ( 1.6 )	31 ( 25.0 )	30 ( 24.2 )	47 ( 37.9 )	11 ( 8.9 )	3 ( 2.4 )
33. 実態に応じた学校保健計画を企画立案する	4.67 ± 1.00	2 ( 1.6 )	28 ( 22.6 )	34 ( 27.4 )	48 ( 38.7 )	11 ( 8.9 )	0 ( 0.0 )
34. 学校保健組織作りのリーダーシップを取る	4.40 ± 1.20	3 ( 2.4 )	19 ( 15.3 )	38 ( 30.6 )	38 ( 30.6 )	19 ( 15.3 )	5 ( 4.0 )
35. 学校保健活動を推進するためのコーディネートをする	4.65 ± 1.19	4 ( 3.2 )	29 ( 23.4 )	35 ( 28.2 )	39 ( 31.5 )	11 ( 8.9 )	5 ( 4.0 )
36. 学校全体の健康実態 (レベル) を改善する	4.63 ± 1.14	3 ( 2.4 )	27 ( 21.8 )	39 ( 31.5 )	36 ( 29.0 )	15 ( 12.1 )	3 ( 2.4 )
37. 気になる子どもの健康実態 (レベル) を改善できる	4.77 ± 1.03	1 ( 0.8 )	30 ( 24.2 )	50 ( 40.3 )	30 ( 24.2 )	9 ( 7.3 )	4 ( 3.2 )
38. 保健室経営方針が教職員に理解される	4.58 ± 1.12	4 ( 3.2 )	21 ( 16.9 )	39 ( 31.5 )	46 ( 37.1 )	8 ( 6.5 )	5 ( 4.0 )
39. 養護教諭の位置や活動について正当な評価を受ける	4.71 ± 1.12	9 ( 7.3 )	17 ( 13.7 )	44 ( 35.5 )	40 ( 32.3 )	11 ( 8.9 )	3 ( 2.4 )
40. 校内の主な会議に出席し、発言する	4.86 ± 1.05	5 ( 4.0 )	32 ( 25.8 )	40 ( 32.3 )	37 ( 29.8 )	8 ( 6.5 )	2 ( 1.6 )

表 2. 養護教諭の自己効力感尺度の因子分析 (主因子法・プロマックス回転)

質問項目	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子	第5因子	
<b>第1因子：学校保健活動のリーダー的役割</b>						
3 4. 学校保健組織作りのリーダーシップを取る	1.022	-0.159	0.025	-0.113	0.034	
3 5. 学校保健活動を推進するためのコーディネートをする	0.970	-0.052	0.064	-0.072	-0.036	
3 3. 実態に応じた学校保健計画を企画立案する	0.928	0.006	-0.145	-0.117	0.059	
3 6. 学校全体の健康実態 (レベル) を改善する	0.822	-0.065	0.053	0.097	-0.077	
1 7. 環境衛生に関する活動を積極的に推進する	0.604	-0.003	0.060	0.066	0.018	
3 1. 学校医や地域の医療機関と学校の健康実態について話し合う	0.594	0.018	-0.133	0.251	0.051	
1 5. 健康診断や健康相談など、健康管理の方法を工夫して実施する	0.540	0.111	0.083	-0.192	0.242	
4 0. 校内の主な会議に出席し、発言する	0.513	-0.067	0.138	0.120	0.087	
3 7. 気になる子どもの健康実態 (レベル) を改善できる	0.512	0.090	0.176	0.246	-0.156	
3 8. 保健室経営方針が教職員に理解される	0.478	0.052	0.242	0.183	-0.250	
3 2. 子どもの問題や学校の問題を、広い視野から見直す	0.448	0.111	-0.068	0.361	0.125	
<b>第2因子：心身の健康課題への対応</b>						
1. 子どもの痛みや感情を受け止めたかかわりをする	0.027	0.871	-0.137	-0.024	-0.134	
6. 保健室に入室している複数の子どもたちに目配りや声かけをしながら、状況を把握する	0.066	0.822	-0.030	0.064	-0.060	
2. 個別の健康ニーズに応じたかかわりをする	-0.096	0.785	-0.013	0.147	-0.052	
7. 保健室でのルールを子どもに伝える	0.015	0.733	0.034	-0.221	0.171	
3. 子どもの訴えの背景 (悩みや生活状況など) を適切に把握する	-0.103	0.705	0.122	0.132	-0.066	
5. 子どもの自己肯定感を高めるような支援をする	0.183	0.603	0.016	0.117	-0.138	
8. 必要に応じて、子どもに対して毅然とした態度をとる	0.186	0.568	0.059	-0.314	0.224	
9. 保健室外でも、子どもと積極的にかかわる	-0.294	0.536	0.156	-0.016	0.073	
<b>第3因子：関係者との信頼関係づくり</b>						
1 8. 担任から、気になる子どもについての相談がもちかけられる	-0.148	0.059	0.880	-0.101	0.128	
1 9. 担任の子どもも理解について、支援やアドバイスをする	-0.007	0.023	0.804	-0.001	0.097	
2 3. スクールカウンセラーや相談員・支援員など (地域担当者も含む) とうまく連携する	0.050	0.130	0.773	-0.221	0.033	
2 4. 保護者と子どもの健康実態について話をする	0.126	-0.071	0.679	0.011	-0.042	
2 5. 保護者や家族との連携を深める	0.076	-0.055	0.633	0.219	-0.098	
2 0. 教職員の心身のサポートをする	0.046	0.071	0.550	0.197	0.078	
<b>第4因子：自己実践のまとめ</b>						
3 9. 養護教諭の位置や活動について正当な評価を受ける	0.254	0.069	0.461	0.065	-0.071	
2 9. 自分の実践をまとめたり、他からの評価を受けたりする機会をもつ	-0.006	0.019	-0.050	0.805	0.129	
2 6. 自分自身のテーマをもって研究する	0.013	-0.046	-0.003	0.803	0.170	
2 8. 生活の中の出来事を教材化する工夫をする	0.054	-0.083	0.027	0.683	0.156	
<b>第5因子：保健教育への積極的な取り組み</b>						
1 2. 担任と協力して、あるいは独自で保健学習をする	0.007	-0.148	0.079	0.238	0.784	
1 1. 担任と協力して、保健学習をする	-0.045	0.085	0.044	0.283	0.681	
1 0. わかりやすい保健指導をする	0.288	0.191	-0.141	0.267	0.418	
	因子間相関	F1	F2	F3	F4	F5
除外 4. 個別の健康ニーズに応じた支援計画を作成する	F1	1.000	0.591	0.660	0.638	0.425
1 3. 児童生徒の委員会活動で、子どもの興味や関心を引き出す	F2		1.000	0.632	0.294	0.386
1 4. 養護教諭の日々の基本的な活動をする	F3			1.000	0.445	0.339
1 6. 安全に関する活動を積極的に推進する	F4				1.000	0.275
2 1. 保健主事に適切なアドバイスをする (兼任の場合を除く)	F5					1.000
2 2. 保健主事と協力して学校保健活動を行う (兼任の場合を除く)						
2 7. 救急処置・カウンセリングなどの実技能力を身につける研修を						
3 0. 自分自身の豊かな感性をはぐくむ						

因子分析：主因子法・プロマックス回転

身のテーマをもって研究する」などの 3 項目からなり、研究実践について示していることから『自己実践のまとめ』と命名した。第 5 因子は「12. 担任と協力して、あるいは独自で保健学習をする」「11. 担任と協力して、保健学習をする」などの 3 項目からなり、保健教育の実践を示していることから『保健教育への積極的な取り組み』と命名した。

### 3. 養護教諭の自己効力感と関連する要因

自己効力感尺度の 5 因子と対象者の属性、研究に関する現状、養護教諭の研究活動等との関連について検討した結果を表 3 に示した。

第 1 因子『学校保健活動のリーダー的役割』と関連が認められたのは、対象者の属性における経験年数、養成機関、研究に関する現状における実践の発表経験、研究

のイメージにおける難易度と苦楽度、実践検証、養護教諭の研究活動であった。経験年数では、20 年以上の者が 9 年以下の者よりも、養成機関では保健師養成学校・その他と短期大学卒業者が 4 年制大学卒業者よりも自己効力感得点平均値が有意に高かった。また、実践の発表経験のある者がいない者よりも自己効力感得点平均値が有意に高かった。研究のイメージにおいては、難易度では、研究を少し難しいと思っている者が、難しいと思っている者より、苦楽度では、研究を楽しんでいる者が苦しいと思っている者よりも自己効力感得点平均値が有意に高かった。実践検証では、いつも・時々行っている者が、そうでない者よりも自己効力感得点平均値が有意に高かった。養護教諭の研究活動では、研究活動 H 群と M 群が研究活動 L 群よりも自己効力感得点平均値が有意

表3. 養護教諭の自己効力感と関連する要因

項目	n	第1因子		第2因子		第3因子		第4因子		第5因子		p 値		
		学級担任のリーダー役割	p 値	心身の健康維持への関心	p 値	関係者との関係づくり	p 値	自己効力感の上昇	p 値	保護者への信頼的対応のみ	p 値			
対象者の属性	小学校	82	4.74 ± 0.85	n.s.	5.61 ± 0.69	n.s.	5.11 ± 0.84	*	4.27 ± 1.00	n.s.	4.43 ± 1.06	n.s.		
	中学校	42	4.70 ± 0.89	n.s.	5.79 ± 0.66	n.s.	5.49 ± 0.74	*	4.21 ± 1.17	n.s.	4.47 ± 1.18	n.s.		
	学校規模													
	99人以下(A)	42	4.72 ± 0.97	n.s.	5.52 ± 0.76	n.s.	5.18 ± 0.88	n.s.	4.20 ± 1.07	n.s.	4.52 ± 1.06	n.s.		
	100人以上399人以下(B)	54	4.68 ± 0.85	n.s.	5.72 ± 0.68	n.s.	5.29 ± 0.84	n.s.	4.20 ± 1.08	n.s.	4.60 ± 1.02	n.s.		
	400人以上(C)	21	4.84 ± 0.74	n.s.	5.79 ± 0.55	n.s.	5.25 ± 0.72	n.s.	4.42 ± 1.02	n.s.	4.90 ± 1.01	n.s.		
	着任年数													
	1年目	32	4.62 ± 0.97	n.s.	5.66 ± 0.63	n.s.	5.30 ± 0.76	n.s.	4.39 ± 1.33	n.s.	4.60 ± 1.06	n.s.		
	2年目	32	4.58 ± 0.82	n.s.	5.54 ± 0.71	n.s.	4.91 ± 0.93	n.s.	3.88 ± 0.92	n.s.	4.29 ± 1.08	n.s.		
	3年目	20	4.88 ± 0.73	n.s.	5.87 ± 0.76	n.s.	5.41 ± 0.71	n.s.	4.38 ± 0.90	n.s.	4.95 ± 0.92	n.s.		
	4年目	24	4.84 ± 0.95	n.s.	5.64 ± 0.66	n.s.	5.36 ± 0.80	n.s.	4.44 ± 1.10	n.s.	4.75 ± 1.11	n.s.		
	5年以上	16	4.90 ± 0.75	n.s.	5.76 ± 0.69	n.s.	5.39 ± 0.80	n.s.	4.27 ± 0.68	n.s.	4.85 ± 1.10	n.s.		
	経歴年数													
	9年以下(A)	18	4.11 ± 0.75	**	5.42 ± 0.71	n.s.	4.46 ± 0.72	**	3.76 ± 0.95	n.s.	3.78 ± 0.94	**		
	10年以上19年以下(B)	18	4.42 ± 0.94	n.s.	5.83 ± 0.60	n.s.	5.17 ± 1.04	n.s.	4.28 ± 1.08	n.s.	4.69 ± 0.66	n.s.		
	20年以上29年以下(C)	46	4.81 ± 0.80	n.s.	5.62 ± 0.68	n.s.	5.31 ± 0.67	n.s.	4.26 ± 1.23	n.s.	4.86 ± 1.26	n.s.		
30年以上(D)	42	5.03 ± 0.79	n.s.	5.76 ± 0.69	n.s.	5.53 ± 0.72	n.s.	4.44 ± 0.84	n.s.	4.75 ± 0.87	n.s.			
養成課程	【多重比較】 C, D > A													
	保健師養成学校・その他(A)	4	5.59 ± 0.74	**	5.56 ± 0.79	n.s.	5.71 ± 0.69	**	4.83 ± 0.79	n.s.	5.75 ± 0.74	**		
	短期大学(B)	103	4.78 ± 0.82	n.s.	5.70 ± 0.68	n.s.	5.33 ± 0.76	n.s.	4.29 ± 1.03	n.s.	4.70 ± 1.00	n.s.		
	4年制大学(C)	17	4.20 ± 0.90	n.s.	5.54 ± 0.69	n.s.	4.58 ± 0.91	n.s.	3.84 ± 1.20	n.s.	4.00 ± 1.23	n.s.		
研究に関する現状	【多重比較】 A, B > C													
	学会等の所属 <sup>a)</sup>	15	5.06 ± 0.91	n.s.	5.98 ± 0.67	n.s.	5.71 ± 0.96	*	4.93 ± 0.94	**	5.00 ± 0.85	n.s.		
	なし	109	4.68 ± 0.85	n.s.	5.63 ± 0.68	n.s.	5.18 ± 0.79	n.s.	4.16 ± 1.04	n.s.	4.59 ± 1.09	n.s.		
	学会への参加経験 <sup>a)</sup>	36	4.88 ± 0.92	n.s.	5.76 ± 0.87	n.s.	5.29 ± 0.95	n.s.	4.56 ± 1.04	n.s.	4.75 ± 0.93	n.s.		
	なし	88	4.67 ± 0.83	n.s.	5.63 ± 0.59	n.s.	5.22 ± 0.77	n.s.	4.12 ± 1.04	n.s.	4.59 ± 1.12	n.s.		
	論文等の発表経験 <sup>a)</sup>	5	3.95 ± 1.22	n.s.	5.18 ± 0.87	n.s.	4.40 ± 1.35	n.s.	4.20 ± 0.77	n.s.	4.20 ± 0.80	n.s.		
	なし	119	4.76 ± 0.84	n.s.	5.69 ± 0.67	n.s.	5.28 ± 0.78	n.s.	4.24 ± 1.07	n.s.	4.66 ± 1.08	n.s.		
	実践の発表経験 <sup>a)</sup>	89	4.84 ± 0.86	*	5.73 ± 0.64	n.s.	5.39 ± 0.77	**	4.43 ± 0.98	**	4.75 ± 1.03	n.s.		
	なし	35	4.44 ± 0.82	n.s.	5.51 ± 0.77	n.s.	4.88 ± 0.86	n.s.	3.78 ± 1.11	n.s.	4.36 ± 1.12	n.s.		
	研究の状況 <sup>a)</sup>	62	4.75 ± 0.83	n.s.	5.70 ± 0.64	n.s.	4.38 ± 1.06	n.s.	4.67 ± 1.61	n.s.	4.73 ± 1.22	**		
	していない	8	4.71 ± 0.90	*	5.64 ± 0.73	n.s.	4.12 ± 1.05	n.s.	0.98 ± 1.16	n.s.	3.85 ± 1.16	n.s.		
	易しい(A)	14	4.45 ± 0.90	n.s.	5.31 ± 0.93	n.s.	4.95 ± 1.03	n.s.	4.42 ± 0.99	**	4.79 ± 0.75	n.s.		
	少し易しい(B)	14	4.79 ± 0.86	n.s.	5.64 ± 0.59	n.s.	5.01 ± 0.84	n.s.	4.31 ± 0.84	n.s.	4.57 ± 1.03	n.s.		
	少し難しい(C)	56	4.99 ± 0.83	n.s.	5.73 ± 0.62	n.s.	5.47 ± 0.76	n.s.	4.59 ± 1.00	n.s.	4.79 ± 1.05	n.s.		
	難しい(D)	44	4.45 ± 0.83	n.s.	5.68 ± 0.74	n.s.	5.1 ± 0.84	n.s.	3.83 ± 1.01	n.s.	4.45 ± 1.17	n.s.		
	研究のイメージ	【多重比較】 C > D												
有益(A)		43	4.90 ± 0.96	n.s.	5.82 ± 0.75	n.s.	5.25 ± 1.00	n.s.	4.67 ± 1.01	**	4.81 ± 1.13	n.s.		
少し有益(B)		61	4.71 ± 0.76	n.s.	5.57 ± 0.67	n.s.	5.22 ± 0.75	n.s.	4.18 ± 0.94	n.s.	4.57 ± 1.01	n.s.		
少し無益(C)		16	4.48 ± 0.95	n.s.	5.63 ± 0.56	n.s.	5.30 ± 0.67	n.s.	3.77 ± 0.98	n.s.	4.67 ± 1.08	n.s.		
無益(D)		2	4.05 ± 0.06	n.s.	6.00 ± 0.35	n.s.	5.57 ± 0.00	n.s.	2.50 ± 1.18	n.s.	3.17 ± 1.18	n.s.		
仕事満足度		【多重比較】 A > C, D												
		楽しい(A)	7	5.55 ± 0.86	*	6.45 ± 0.30	**	5.84 ± 0.61	n.s.	5.43 ± 1.18	*	5.71 ± 0.87	*	
		少し楽しい(B)	25	4.91 ± 0.72	n.s.	5.74 ± 0.61	n.s.	5.22 ± 0.69	n.s.	4.45 ± 0.88	n.s.	4.76 ± 0.96	n.s.	
		少し苦しい(C)	55	4.67 ± 0.82	n.s.	5.64 ± 0.68	n.s.	5.22 ± 0.82	n.s.	4.17 ± 0.90	n.s.	4.45 ± 0.98	n.s.	
		苦しい(D)	35	4.55 ± 0.95	n.s.	5.69 ± 0.72	n.s.	5.20 ± 0.95	n.s.	4.08 ± 1.17	n.s.	4.64 ± 1.24	n.s.	
		職場の人間関係	【多重比較】 A > D											
			満足・やや満足(A)	101	4.77 ± 0.88	n.s.	5.70 ± 0.67	n.s.	5.29 ± 0.83	n.s.	4.28 ± 1.10	n.s.	4.69 ± 1.08	n.s.
			どちらでもない(B)	19	4.56 ± 0.78	n.s.	5.65 ± 0.72	n.s.	5.05 ± 0.76	n.s.	4.12 ± 0.92	n.s.	4.44 ± 1.09	n.s.
			不満・やや不満(C)	4	4.39 ± 0.77	n.s.	5.56 ± 1.01	n.s.	4.96 ± 0.79	n.s.	4.08 ± 0.88	n.s.	4.25 ± 0.57	n.s.
			うまく・ややうまくいっている(A)	117	4.75 ± 0.85	n.s.	5.68 ± 0.68	n.s.	5.24 ± 0.84	n.s.	4.25 ± 1.06	n.s.	4.64 ± 1.06	n.s.
			どちらでもない(B)	5	4.38 ± 1.26	n.s.	5.75 ± 0.72	n.s.	5.34 ± 0.96	n.s.	4.53 ± 0.96	n.s.	5.00 ± 0.82	n.s.
	うまく・ややうまくいっていない(C)		2	4.64 ± 0.77	n.s.	5.00 ± 0.71	n.s.	4.86 ± 0.40	n.s.	3.67 ± 1.41	n.s.	3.50 ± 2.12	n.s.	
	いつも・時々(A)		75	4.99 ± 0.86	**	5.78 ± 0.72	*	5.36 ± 0.89	*	4.55 ± 1.04	**	4.85 ± 1.07	*	
	どちらでもない(B)		30	4.39 ± 0.78	n.s.	5.64 ± 0.57	n.s.	5.16 ± 0.67	n.s.	4.08 ± 0.89	n.s.	4.30 ± 0.85	n.s.	
	あまり・まったく(C)		19	4.25 ± 0.62	n.s.	5.46 ± 0.65	n.s.	4.93 ± 0.68	n.s.	3.35 ± 0.81	n.s.	4.33 ± 1.20	n.s.	
	養護教諭の研究活動		【多重比較】 A > B, C											
H群(4.45~)			42	5.11 ± 0.77	**	5.88 ± 0.51	n.s.	5.53 ± 0.76	**	4.91 ± 0.93	**	5.10 ± 0.91	**	
M群(3.85~4.44)			41	4.86 ± 0.79	n.s.	5.63 ± 0.73	n.s.	5.24 ± 0.82	n.s.	4.33 ± 0.92	n.s.	4.54 ± 0.97	n.s.	
L群(~3.84)			41	4.21 ± 0.78	n.s.	5.49 ± 0.75	n.s.	4.94 ± 0.80	n.s.	3.49 ± 0.80	n.s.	4.27 ± 1.16	n.s.	

a) はt検定またはMann-WhitneyのU検定, WilcoxonのU検定  
無印は分散分析, 後の検定, またはKruskal WallisのH検定, Mann-WhitneyのU検定  
\*\*p<0.01, \*p<0.05, n.s.:not significant

に高かった。

第2因子『心身の健康課題への対応』と関連が認められたのは、研究のイメージにおける苦楽度と実践検証であった。苦楽度では、楽しいと思っている者が少し苦しい・苦しいと思っている者より、実践検証ではいつも・時々行っている者があまり・まったく行わない者よりも、自己効力感得点平均値が有意に高かった。

第3因子『関係者との信頼関係づくり』に影響しているのは対象者の属性における校種、経験年数、養成機関、研究に関する現状における学会等の所属、実践の発表経験、実践検証、養護教諭の研究活動であった。校種では、中学校に勤務している者が小学校に勤務している者より、経験年数では10年以上の者が9年以下の者より、養成機関では保健師養成学校・その他、短期大学卒業者が4年制大学卒業者よりも自己効力感得点平均値が高かった。学会等の所属では、所属している者が所属していない者より、実践の発表経験では発表経験のある者がいない者よりも自己効力感得点平均値が有意に高かった。また、実践検証ではいつも・時々行っている者があまり・まったく行わない者より、養護教諭の研究活動では、研究活動H群が研究活動L群よりも、自己効力感得点平均値が有意に高かった。

第4因子『自己実践のまとめ』と関連が認められたのは、研究に関する現状における学会等の所属、実践の発表経験、研究のイメージにおける難易度、有益度、苦楽度、実践検証、養護教諭の研究活動であった。学会等の所属では、所属している者が所属していない者より、実践の発表経験では発表経験のある者がいない者よりも自己効力感得点平均値が有意に高かった。また、研究のイメージにおいては、研究を少し難しいと思っている者が難しいと思っている者より、有益と思っている者が、少し無益、無益と思っている者より、楽しいと思っている者が少し苦しい、苦しいと思っている者より自己効力感得点平均値が有意に高かった。実践検証では、いつも・時々行っている者があまり・まったく行わない者より、養護教諭の研究活動では、研究活動H群が研究活動M群よりも研究活動L群よりも自己効力感得点平均値が有意に高かった。

第5因子『保健教育への積極的な取り組み』と関連していたのは、対象者の属性における経験年数、養成機関、研究に関する現状における研究の状況、研究のイメージにおける苦楽度、実践検証、養護教諭の研究活動であった。

5因子のすべてに有意な関連が認められた項目は、実践検証のみであった。養護教諭の研究活動では、『学校保健活動のリーダー的役割』『関係者との信頼関係づくり』『自己実践のまとめ』『保健教育への積極的な取り組み』の4因子で、研究活動H群は研究活動L群よりも自己効

力感得点平均値が有意に高いことが示された。また、経験年数と養成機関で、『学校保健活動のリーダー的役割』『関係者との信頼関係づくり』『保健教育への積極的な取り組み』に同様の有意差が認められた。仕事満足度、職場の人間関係においては、すべての因子で有意な関連は認められなかった。

## IV 考察

### 1. 養護教諭の自己効力感の特徴

本調査では、鈴木ら<sup>13)</sup>により開発された養護教諭の自己効力感尺度を用いて調査を行った。この尺度は、「養護教諭として手応えを感じる仕事場面やその時の人間関係」「養護教諭として自信をもって活動できる仕事場面やその時の人間関係」について、半構造的面接調査により選定された40の質問からなる、養護教諭の実際の職務内容について表しているものである。本調査ではこの養護教諭の自己効力感尺度の因子分析から5因子が抽出された。鈴木ら<sup>13)</sup>の先行研究においても同様に5因子が抽出されていたが、構造に違いの認められる部分があった。

第1因子として『学校保健活動のリーダー的役割』が抽出され、第2因子である『心身の健康課題への対応』は、先行研究で第2因子『子どもとのかかわり』と第5因子『保健室での規範』と命名された2つの因子を併せた内容で抽出された。『関係者との信頼関係づくり』は、先行研究と同様に第3因子として抽出された。藤田<sup>19)</sup>は、養護教諭は子どもの問題を通して職場のあらゆる教職員とつながりをつくるという特異な立場を生かして、必要な連携と協働を生み出していくと述べている。平成20年1月の中央教育審議会答申<sup>2)</sup>においても、養護教諭は学校内外の関係機関・関係者との連携を推進し、コーディネーターの役割を担う必要があると示されている。

第5因子『保健教育への積極的な取り組み』は先行研究では第4因子として抽出されていた。『自己実践のまとめ』と命名した第4因子は「自分の実践をまとめたり、他からの評価を受けたりする機会をもつ」「自分自身のテーマをもって研究する」「生活の中の出来事を教材化する工夫をする」という研究活動の具体的な内容として捉えることができる3項目で構成されている。このうち「自分の実践をまとめたり、他からの評価を受けたりする機会をもつ」「自分自身のテーマをもって研究する」の2項目は先行研究では除外された項目であったが、本調査では因子として抽出された。斉藤ら<sup>20)</sup>は、養護教諭に関する学会発表演題の動向を分析した中で、養護教諭に関する演題が年々増加していることと、発表者の所属の割合が「大学のみ」は減少傾向にあり、「大学+現職」および「現職のみ」が増加傾向にあることをあげ、この傾向は今後も続くことを指摘している。本調査対象者のうち、実践記録の誌上発表や自己実践の口頭発表、原著論文や

研究報告の発表など、形は様々であるが自己実践をもとに成果と課題を明らかにしたまとめを発表した経験のある者が71.8%あったことが要因であると考えられる。また、本調査では、経験年数の多い者が対象者に多かったことにより、これまでの経験において研究実践等を発表する機会が多くあったことが本因子を抽出することに繋がったと考えられる。従って、職務である研究活動に積極的に取り組む養護教諭が増えてくることにより、本因子を抽出する意味はより大きくなるであろう。

## 2. 養護実践における研究テーマ

養護教諭の自己効力感に関連する要因では、経験年数が増加するほど職務への自己効力感が高まることが先行研究<sup>12-14)16)</sup>で明らかにされており、本調査も同様な結果が得られた。養護教諭のほとんどは1人配置のため、ひとりで思考判断しなければならない場面がある。経験年数が増加することで職務理解が深まり専門的知識や技術など向上することで、養護教諭の自己効力感を高めていると考えられる。また、本調査では、養成機関の保健師養成学校・その他と短期大学卒業者が4年制大学卒業者よりも『学校保健活動のリーダー的役割』『関係者との信頼関係づくり』『保健教育への積極的な取り組み』において自己効力感得点平均値が有意に高い結果が得られた。経験年数では、20年以上の者が9年以下の者よりも『学校保健活動のリーダー的役割』『関係者との信頼関係づくり』『保健教育への積極的な取り組み』において自己効力感得点平均値が有意に高い結果が得られた。これらが同様の結果となったのは、調査対象者の中に、短期大学卒業者に経験年数の多い者が多くいたためであると考えられた。

本調査では、実践検証をいつも・時々行っている者が、そうでない者または、あまり・まったく行っていない者よりも自己効力感のすべての因子において自己効力感得点平均値が有意に高い結果が得られた。これは、実践検証を行うことは職務への自己効力感を向上させるという先行研究<sup>12-13)</sup>と同様の結果であった。養護教諭の行う研究は、児童生徒との関わりである指導や支援活動のなかからの課題や疑問への問いかけから始まる実践研究が取り組みやすいことや、自己の実践を振り返り検証する実践検証が研究活動の原点となり得る<sup>16)</sup>。甲斐<sup>21)</sup>は、研究は自分の観察してきたことを実証し、自己の実践活動を評価し改善していくための重要な作業であると述べている。これらのことから、実践検証によって整理された養護実践の疑問や課題について分析や考察を行い、研究として客観的にまとめていくことが求められていると考える。また、こうして積み上げられた研究の成果は、他の養護教諭が参考にし、今後の養護実践に生かすことができるものとなる。

堀内<sup>22)</sup>は、「養護教諭らしい」研究は、日々の活動の

中での疑問や気づきを基礎にした着眼から生まれると述べている。養護教諭の自己効力感として抽出された『学校保健活動のリーダー的役割』『心身の健康課題への対応』『関係者との信頼関係づくり』『自己実践のまとめ』『保健教育への積極的な取り組み』の5因子は、心身の健康管理や学校環境の管理を含む「保健管理」、保健指導、保健学習、啓発活動を含む「保健教育」、心身の健康課題への対応や児童生徒の支援に当たった関係者との連携を含む「健康相談」、「保健室経営」「保健組織活動」と「その他」の学校保健に関わる研究と示された養護教諭の専門領域における主な職務内容<sup>2)</sup>である。すなわち、養護実践のすべてが、養護教諭の行う実践研究の研究テーマになり得る可能性が示唆された。

## V まとめ

養護教諭の自己効力感が職務に影響を与えることを明らかにする目的で、養護教諭の自己効力感の特徴と自己効力感に関連する要因について検討した。対象はA県内の公立小・中学校に勤務する養護教諭124名、調査期間は2012年8月8日から9月12日である。以下のような結果が得られた。

1. 養護教諭の自己効力感尺度を因子分析し、『学校保健活動のリーダー的役割』『心身の健康課題への対応』『関係者との信頼関係づくり』『自己実践のまとめ』『保健教育への積極的な取り組み』の5因子が抽出された。
2. 第1因子『学校保健活動のリーダー的役割』と関連しているのは、対象者の属性における経験年数、養成機関、研究に関する現状における実践の発表経験、研究のイメージにおける難易度と苦楽度、実践検証、養護教諭の研究活動であった。第2因子『心身の健康課題への対応』と関連しているのは、研究のイメージにおける苦楽度と実践検証であった。第3因子『関係者との信頼関係づくり』と関連しているのは対象者の属性における校種、経験年数、養成課程、研究に関する現状における学会等の所属、実践の発表経験、実践検証、養護教諭の研究活動であった。第4因子『自己実践のまとめ』と関連しているのは、研究に関する現状における学会等の所属、実践の発表経験、研究のイメージにおける難易度、有益度、苦楽度、実践検証、養護教諭の研究活動であった。第5因子『保健教育への積極的な取り組み』と関連しているのは、対象者の属性における経験年数、養成機関、研究に関する現状における研究の状況、研究のイメージにおける苦楽度、実践検証、養護教諭の研究活動であった。
3. 5因子すべてに有意な関連が認められた項目は、実践検証のみであった。仕事満足度、職場の人間関係においては、すべての因子で有意な関連は認められなかった。

以上のことから、養護教諭の行う研究は、実践検証によって見つけたもしくは整理された養護実践の疑問や課題について分析や考察を行い、今後の養護実践に生かすことのできるよう客観的にまとめていくことが求められていると考えられる。また、養護実践のすべての場面で養護教諭の行う実践研究の研究テーマとなり得る可能性が示唆された。

## VI 引用文献

- 1) 中央教育審議会：教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について（答申）平成24年8月28日
- 2) 中央教育審議会：子どもの心身の健康を守り、安全・安心を確保するために学校全体としての取組を進めるための方策について（答申）平成20年1月17日
- 3) Bandura A, 祐宗省三編：社会的学習理論の新展開, 金子書房, 105-109, 1985
- 4) 江口瞳・寺澤孝文：一般性自己効力感と看護実践に対する自己効力感の学年間の相違, 広島国際大学看護学ジャーナル, 3, 13-24, 2006
- 5) 江川隆子・神谷千鶴・江崎真知子：看護師としての実践力を向上しよう 透析を受けている人の自己効力感をどのように高めるか, 臨床透析, 24, (3), 371-376, 2008
- 6) 大瀬望・松見しのぶ：がん患者の自己効力感を支える看護「患者のニーズにひたすら応える」看護, がん看護, 13, (3), 377-379, 2008
- 7) 遠藤恵子・松永保子・遠藤芳子・佐藤幸子・井上京子・三澤寿美・藤田あけみ・佐竹真次：看護学生の自己効力感 (Self-Efficacy) に関する研究 (第1報) —基礎看護技術演習による自己効力感の変化と影響する要因—, 山形保健医療研究, 2, 7-13, 1999
- 8) 永谷実穂：臨地実習における自己効力感の変化に関する研究, 静岡県立大学短期大学部研究紀要, 24, 1-12, 2010
- 9) 山崎章恵・阪口しげ子・百瀬由美子：看護学生の自己効力感を高める実習指導の検討—自己効力感が低い学生の実習中の体験から—, 信州大学医療技術短期大学部紀要, 27, 41-48, 2002
- 10) 竹綱誠一郎・鎌原雅彦・沢崎俊之：自己効力感に関する研究の動向と問題, 教育心理学研究, 36(2), 172-184, 1988
- 11) 佐藤充宏・田中理恵・長積仁：中学校の運動部活動が部員の学校生活スキルに及ぼす影響—自己効力と達成動機に着目して—, 教育保健研究, 13, 17-23, 2004
- 12) 豊島幸子・吉田亨：養護教諭の職務への自己効力感の要因—自己効力感尺度 (試案) を用いて—, 日本養護教諭教育学会誌, Vol.12, No.1, 77-86, 2009
- 13) 鈴木薫・鎌田雅史・淵上克義：養護教諭の自己効力感の形成に及ぼす学校組織特性の影響 (第I報) —学校組織における養護教諭の自己効力感の認知構造—, 日本養護教諭教育学会誌, Vol.13, No.1, 17-26, 2010
- 14) 鈴木薫・淵上克義・鎌田雅史：養護教諭の自己効力感の形成に及ぼす学校組織特性の影響 (第II報) —管理職, 学校組織風土と養護教諭の自己効力感の関係—, 日本養護教諭教育学会誌, Vol.13, No.1, 27-36, 2010
- 15) 学校経営の視点に立った, 保健室経営の在り方調査委員会：保健室経営計画作成の手引 平成26年度改訂, (財)日本学校保健会, 7-10, 2015
- 16) 渡辺美恵・山田小夜子・土田満：養護教諭の研究活動と職務への自己効力感との関連—研究活動の現状についての調査結果の分析—, 東海学校保健研究, 38(1), 45-56, 2014
- 17) 中村朋子・藤井寿美子・外山恵子・浅野純美・門田美千代・河内信子・神戸美絵子・竹崎登喜江・西尾ミツ・松嶋紀子・村木久美恵：養護教諭の研究能力に関する研究 第1報 研究に関する実態調査, 日本養護教諭教育学会誌, Vol.3, No.1, 9-20, 2000
- 18) 齊藤茂子・天野雅美：看護専門学校教員の研究活動尺度の開発, 看護教育研究学会誌, 1巻2号, 3-14, 2009
- 19) 藤田和也：養護教諭が担う「教育」とは何か—実践の考え方と進め方—, 山漁村文化協会, 58-83, 2008
- 20) 齊藤ふくみ・堀内久美子：養護教諭に関する学会発表演題の動向—日本学校保健学会および日本養護教諭教育学会の分析から—, 熊本大学教育学部紀要, 人文科学, 第53号, 123-131, 2004
- 21) 甲斐一郎：研究のすすめ—養護実践研究への期待 (特集 実践・理論・教育の連関～実践を深め, 広げるために～), 学校救急看護研究, Vol.9, No.1, 22-25, 2016
- 22) 堀内久美子：養護教諭の研究能力向上に向けて—日常の「気づき」を大切に— (特集 養護教諭の研究能力), 日本養護教諭教育学会誌, Vol.3, No.1, 1-4, 2000